

ロシアバレエの基礎を築いたデイドロ

村山 久美子

さらさらと幕が上がれば
無重力のごとくふんわりと立つ
あでやかなイストーミナ。
ニンフの群れに囲まれて
魔法のようなヴィオロンの音に
耳を傾ける。
さて片足をそっと床にふれ
もう一方をゆっくりと旋回させた。
と見る間に小さな跳躍
と、今度は大きく飛翔する
その飛翔は
アイオロスの口に吹かれた綿毛のよう。
身をねじっては またほどき
やがて、素早く足を打ち合わす。

(プーシキン17巻全集 (ロシア語)「オネーギン」
第6巻13頁より拙訳)

ロシアの国民的詩人プーシキンが魅了されて、代表作「オネーギン」の中に描き出したイストーミナのこの踊りは、プーシキンと同時代にペテルブルグのバレエのリーダーであったデイドロの創作であった。プーシキンはデイドロのバレエを、「デイドロのバレエは、絵のようなファンタジーや、並々ならぬ魅力にあふれている。わが国のロマン主義作家の一人(プーシキン)はその中に、全フランス文学よりも多くの詩情を見出した」とまで絶賛している。

偉大な詩人をこれほどまでに魅了したデイドロの作品は、どんなものであったのだろうか。そして、ロシアの舞台芸術の土台が築かれた重要な時期にあっていたデイドロのペテルブルグでの活動は、ロシア・バレエ史にどのような足跡を残しているのだろうか。

ストックホルム生まれのフランス人、シャルル・ルイ・デイドロ(1767-1837)は、ダンサー・振付家、バレエ教師として、1801~1811年と1816~1829年に、ペテルブルグの帝室マリインスキー劇場で働いた。

振付の才豊かで、演出のアイデアにも富み、教師としても非常に優れていたデイドロの活動は、ロシア・バレエを大きく発展させた。

ノヴェールやドベルヴァールと仕事をし、大きな影響を受けた彼は、バレエに人間の波立つ感情を盛り込むこと、同時代が当面しているテーマを扱って内容の充実を計り、それをドラマティック

な踊りで表現することを目指した。

彼の情感あふれる振付は、ドラマティックなダンサーを育て上げ、しかも、感情を自由に表現するためには、テクニクを自由に駆使できなければならないという考えをもつデイドロのスパルタ式教育は、ダンサーのテクニクを著しく向上させた。ロシア・バレエはたちまち西欧に肩を並べる力を蓄え、加えて、バレエは技術を見せるだけでなく、芸術の諸要素が融合したドラマティックな芸術であるというロシア・バレエの基本理念が、ここで根付くことになった。19世紀前半にこうしてデイドロによって作られたバレエの強力な基盤が、19世紀後半のプティパのバレエの開花へとつながっていったのである。